令和５年　６月２８日

令和４年度　特別の教育課程の実施状況等について

栃木県		
学　校　名	管理機関名	設置者の別
足利市立桜小学校	足利市教育委員会	公立

１．特別の教育課程の内容

（１）特別の教育課程の概要

本市全小学校において、平成１５年度より取り組んできた英会話学習の内容と外国語活動・外国語科の内容を関連づけた独自の年間指導計画を作成し、「話すこと」「聞くこと」に特化した指導を行うことで、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

必要となる教育課程の基準の特例については、「教育課程特例校編成の基本方針等について」を参照。

２．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

⊙計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

（２）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

⊙実施している

・実施していない

（３）自校における評価

・第１学年からの英会話学習の実施が、英語によるコミュニケーションの基礎的な能力の育成につながっているか。

年度初めには、前学年からの積み重ねを感じられる。あいさつや月・曜日の言い方などの定着が感じられる。コミュニケーションをとる上で大切な英語を聞く耳が育っていると思う。聞く力は話す・読む・書く力の基礎となるものなので低学年のうちから英会話を実施することは基礎的な能力の育成につながっていると思われる。

・第１学年からの英会話学習の実施は、英語に慣れ親しむことにつながっているか。

ネイティブの先生の英語に触れたり関わったりすることや、授業の始めに行うあい

さつの積み重ねで基本的な英語での対応ができている。身の回りの簡単な言葉をたくさん英語に直して伝えることで、英会話に対する抵抗感がなく、楽しみながら学習に取り組んでいる。ゲームや歌、いろいろなジェスチャーを取り入れながらの授業で１年生も英会話の学習をとても楽しみにしており、慣れ親しむことにつなっがっている。

・第１学年からの英会話学習の実施によって、外国語や外国の文化に対する興味・関心が高まっているか。

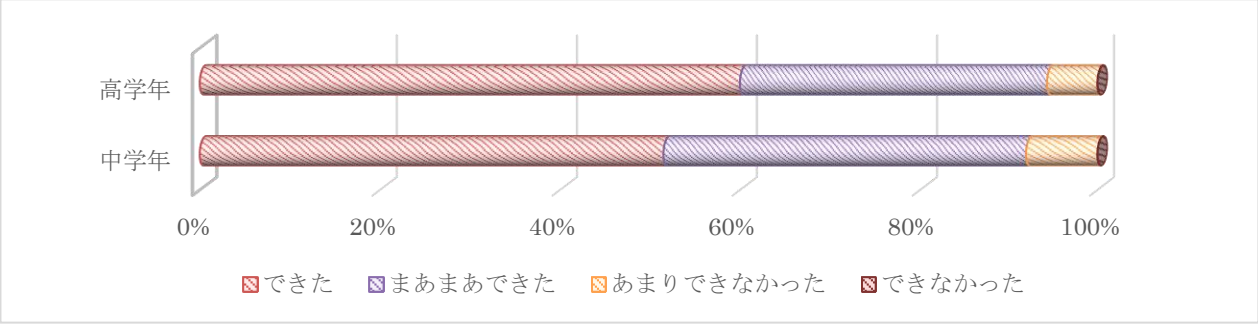
ハロウィンやクリスマスなどの文化について知る機会につながっていると思う。初めて知る文化に驚いたり、興味深く思うような反応をしている児童が多い。しかし、毎年行うことで、自然に外国の文化を受け入れ、日本文化との違いも当たり前のこととして浸透しているように感じられる。

・その他、第１学年からの英会話学習の実施に期待すること等。

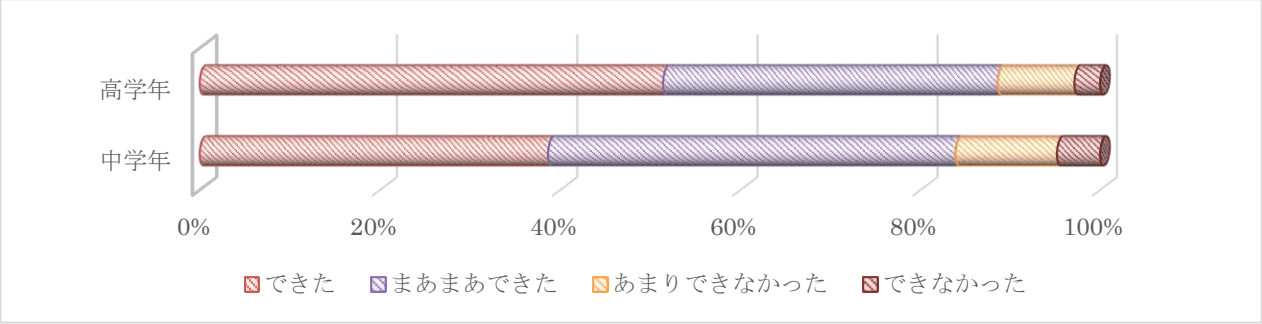
低学年から生きた英語を学習することは意義がある。外国語への苦手意識をもたせないことを前提として取り組んでいる。英語に対する抵抗感をなくし、アクティビティなどを通し楽しく活動しながら言葉（単語）の繰り返し練習もして、英語での会話が自然にできることを期待している。授業以外の時間でもＡＬＴやＥＡＡと関わる時間を積極的に設け、外国語活動の学習へとつなげられるようにしていけるとよい。

（４）学校関係者による評価

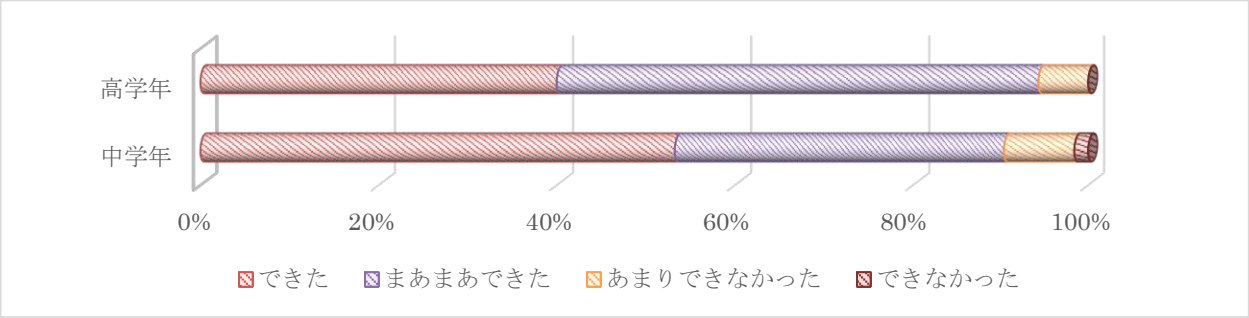
・ ＡＬＴやＥＡＡとの学習についての意識。（英会話学習について、ＡＬＴやＥＡＡとの学習を楽しいと評価している児童。）



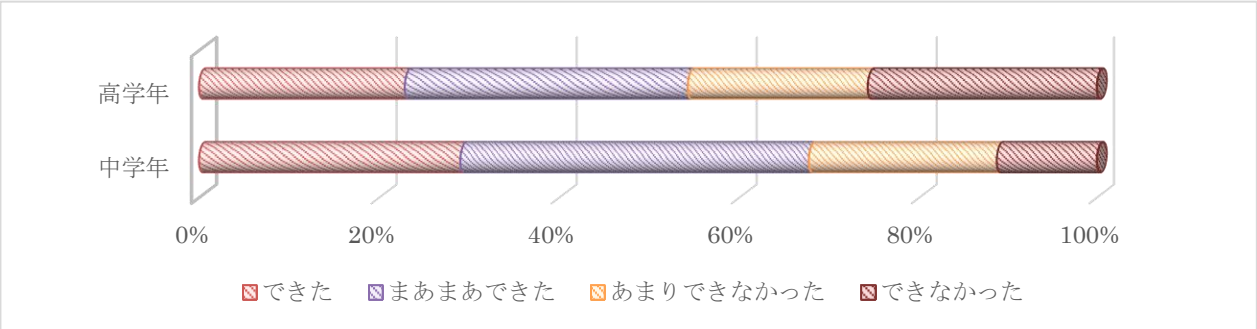
・ ＡＬＴやＥＡＡとの活動内容についての意識。（英会話学習について、その時間で学んだことをＡＬＴやＥＡＡ相手に活用できたと評価している児童。）



・ 英語によるコミュニケーション能力の自己評価。（英会話学習について、学んだことを生かして、友達と簡単な会話ができたと評価している児童。）



・ 英会話学習について将来の有用性への意識。（英会話学習について、学んだことを学校の外で活用できた（活用できる）。）



・ 自由記述では、中学年までは英語が話せるようになった嬉しさや、英語で会話したり買い物ゲームなどのアクティビティを通して英語を使ったりすることの楽しさに関する記述が多い。高学年では英語チャレンジＤＡＹに言及し、複数のＡＬＴと楽しく話しながら英語を学べたことを挙げる児童が多かった。

３． 実施の効果及び課題

児童による評価、問１・問２では共に８０％を超える割合の児童が英会話学習の授業に楽しんで取り組んでいるという結果が得られた。この結果から、英語に対する興味・関心は３年生以上の学年で高く、EAA や ALT との授業に前向きな姿勢で授業に取り組んでいるといえる。これは毎年同じような傾向が見られる。

問３のコミュニケーション能力の自己評価では９０％の児童ができていると答えており、授業中に積極的に英語で会話しようという姿勢が伺えた。問４の将来の有用性への意識では、できる（できた）と感じている児童は中学年で６０％強、高学年で５０％ほどにとどまり、割合としては、他の質問の結果に比べやや低い結果になった。これは、実際に学校外で英語を使う機会がそれほど多くはないということに起因していると考

えられる。

他学年との交流、また英語チャレンジ DAY などの英語の授業を通して、自分の英語力が身についていることを実感できる児童が少しずつ増えてきている。

単元ごとのゴールを明確にし、授業で学んだことを発表したり、生かしたりできるような場面を意図的に設定することで、英語を学ぶことの楽しさや有用性を見いだせるような授業づくりをこれからも意識していく必要がある。

４．課題の改善のための取組の方向性

取り組みの方向性として、今年度①～③の三点を継続して取り組んでいく。

①ゴールを意識した授業作り

単元ごとのゴールを明確に提示し、グローバルな視野をもたせ、なぜ英語を学ぶのか目的をもって学ばせることで、有用性への実感につながっていくのではないかと考える。

他学年との交流、英語チャレンジ DAY など、必然性のある目的・場面・状況を意図的に設定し、積極的に活用していくことで、児童の達成感や自信につながると考える。

②Teacher’s Talk の活用

授業の内容に関連付け、授業の導入時には EAA や ALT と担任との Teacher’s Talk を実践し、英会話のモデルを示すことで、児童の興味・関心が高まると考える。

また、教師と児童、児童同士の small talk の会話の場面を意図的に取り入れ、会話を繰り返すことで、表現の定着につながると考える。

③他教科や行事等と関連付けた授業の実践

児童の実態や興味・関心を把握し、他教科や行事（遠足・修学旅行）等と関連付けた授業を実践していくことで、英語の必要性を実感し、コミュニケーションの手段の１つとして活用していく力を養っていけると考える。